☆帝国主義国、後進国、「労働者国家」
三ブロック階級闘争を
世界プロ独－世界共産主義の勝利へ！
共産主義者同盟

7月3日
毎月3回　3の日発行
第270号
編集発行人　鹿島　勇
一部　40円
年間購読料20回1,000円（〒共）

戦旗

戦旗社
東京都千代田区三崎町2－7－6滝沢ビル内電話代表03(264)2962　振替　東京26110

7・4　第五回全国叛軍連絡会議　新潟大学医学部講堂
三里塚闘争
厚木基地解体闘争　2時小田急大和駅
7・5　第八回小西叛軍裁判
7・7　入管闘争

沖縄闘争から更に日共闘争の粉砕めざし

16－17 日本反帝戦線第二回大会へ

はじめに

❶全国の同志諸君・労働者諸君・農民・インテリゲンツィア・学生諸君！

暫しの沈黙を経たからも、ふたたび日本階級闘争の炎は、大きく七〇年代を焼えようとしている。色あせたカンパニア闘争の展望を今こそ小なこと、革命的左翼の闘いからの闘争が、我々によってきり拓かれようとしているのだ。

五・六月沖縄一本土を貫く赤い炎は、新しい時代の到来を力強いプロレタリアの星雲と共に示唆するものである。機動隊を恐怖の対象へと押しこめることによって、民・民共闘の結集を制圧し、人民革命的左翼内部に発生した日和見主義、あるいは、ゆるやかな、ブルジョア民主主義的民族主義による、なりふり構わぬ動員への猛撃を強めている。

このような情勢の到来は、六九年秋闘決戦の敗北が七〇年代前半に決戦」において大衆的に確認された時に、プロレタリア人民が抱いた一時の衝撃を打ち消すように、より広汎な新しい階級意識をもって主体的に乗りひらけられる階級的力量の発展として一挙に提起されるだろう。だが我々にとっては、六九年四・二八沖縄闘争「中央集力闘争」の敗北が突きつけた、全共闘運動なる日本階級闘争上に生まれた大衆的武装闘争を頂点とする革命的左翼の指導性の喪失と、マルクス主義思想に対する批判と、それゆえ、党の建設の問題をめぐって、「党」内部に異なる日和見主義者にすぎず、その裏面なブルジョア民主主義的民族主義によるたりない動揺的人民は、我々の隊列への猛撃を強めている。

このような情勢の到来は、六九年秋闘決戦の敗北が七〇年代前半に決戦」において大衆的に確認された時に、プロレタリア人民が抱いた一時の衝撃を打ち消すように、より広汎な新しい階級意識をもって主体的に乗りひらけられる階級的力量の発展として一挙に提起されるだろう。だが我々にとっては、六九年四・二八沖縄闘争「中央集力闘争」の敗北が突きつけた、全共闘運動なる日本階級闘争上に生まれた大衆的武装闘争を頂点とする革命的左翼の指導性の喪失と、マルクス主義思想に対する批判と、それゆえ、党の建設の問題をめぐって、「党」内部に異なる日和見主義者にすぎず、その裏面なブルジョア民主主義的民族主義による、なりふり構わぬ動員への猛撃を強めている。

このような情勢の到来は、六九年秋闘決戦の敗北が七〇年代前半に決戦」において大衆的に確認された時に、プロレタリア人民が抱いた一時の衝撃を打ち消すように、より広汎な新しい階級意識をもって主体的に乗りひらけられる階級的力量の発展として一挙に提起されるだろう。だが我々にとっては、六九年四・二八沖縄闘争「中央集力闘争」の敗北が突きつけた、全共闘運動なる日本階級闘争上に生まれた大衆的武装闘争を頂点とする革命的左翼の指導性の喪失と、マルクス主義思想に対する批判と、それゆえ、党の建設の問題をめぐって、「党」内部に異なる日和見主義者にすぎず、その裏面なブルジョア民主主義的民族主義による、なりふり構わぬ動員への猛撃を強めている。

動員するのは体制内宗教であり、「革命的左翼」内部に異なる日和見主義者にすぎず、その裏面なブルジョア民主主義的民族主義によるたりない動揺的人民は、我々の隊列への猛撃を強めている。

このような情勢の到来は、六九年秋闘決戦の敗北が七〇年代前半に決戦」において大衆的に確認された時に、プロレタリア人民が抱いた一時の衝撃を打ち消すように、より広汎な新しい階級意識をもって主体的に乗りひらけられる階級的力量の発展として一挙に提起されるだろう。だが我々にとっては、六九年四・二八沖縄闘争「中央集力闘争」の敗北が突きつけた、全共闘運動なる日本階級闘争上に生まれた大衆的武装闘争を頂点とする革命的左翼の指導性の喪失と、マルクス主義思想に対する批判と、それゆえ、党の建設の問題をめぐって、「党」内部に異なる日和見主義者にすぎず、その裏面なブルジョア民主主義的民族主義による、なりふり構わぬ動員への猛撃を強めている。

動員するのは体制内宗教であり、「革命的左翼」内部に異なる日和見主義者にすぎず、その裏面なブルジョア民主主義的民族主義による、なりふり構わぬ動員

6・30 佐藤訪韓阻止闘争克ち取る

礫川公園に結集し、連続闘争に決起

七月一日、朴政権大統領の三選就任式典に出席するという名目をもって佐藤の訪韓が予定されている事に対する佐藤訪韓阻止闘争が6月30日～7月1日と連続闘争として展開された。

当初予定されていた明治公園での集会は、6・17闘争における反帝機線の突出した戦闘的な戦闘と、6・30礫川公園に結集した反帝戦線部隊との闘い（六千余名が逮捕されるという）等によって激化した権力が明治公園での集会を認めないと当日になってこの集会に対し厳重な警戒態度をしかけてきたのである。これに対し、集会場を礫川公園に変えるという事態をおこしつつも二千余名の中核的な先進的労働者、学生、市民が結集し、このデモンストレーションは成功裏に終られた。

そして、この集会において明らかとなった事は、明治公園において、東京入管闘の主催として開かれる予定でありつつも6・15における八派共闘の解体そのものがまさしく東京入管闘の内部の問題を当然学んでいた前衛の中核派の指導によって、[redacted]あるC0年七・七、山崎発言以降の中核派の裏切り行動に一連動の一環として、八派共闘解体に誘引しまきつつ東京入管闘の内部にも動揺をおこさせようとしているという事である。しかしながら中核派に対して、東京入管闘の主催として、連続闘争として、集会を開催し、我々と共に闘う事を呼びかけ、この闘争を通じて、八派共闘解体の策動を粉砕し、中核派の裏切り行為を暴露し、中核派の分裂を促進する事である。

そして、この集会は、明治公園における集会を禁止され、デモンストレーションは禁止された。

そして、この集会において、東京入管闘の主催として開かれる予定でありつつも6・15における八派共闘の解体そのものがまさしく東京入管闘の内部の問題を当然学んでいた前衛の中核派の指導によって、[redacted]あるC0年七・七、山崎発言以降の中核派の裏切り行動に一連動の一環として、八派共闘解体に誘引しまきつつ東京入管闘の内部にも動揺をおこさせようとしているという事である。しかしながら中核派に対して、東京入管闘の主催として、連続闘争として、集会を開催し、我々と共に闘う事を呼びかけ、この闘争を通じて、八派共闘解体の策動を粉砕し、中核派の裏切り行為を暴露し、中核派の分裂を促進する事である。

その後、集会場を礫川公園に変えるという事態をおこしつつも二千余名の中核的な先進的労働者、学生、市民が結集し、このデモンストレーションは成功裏に終られた。

そして、この集会において明らかとなった事は、明治公園において、東京入管闘の主催として開かれる予定でありつつも6・15における八派共闘の解体そのものがまさしく東京入管闘の内部の問題を当然学んでいた前衛の中核派の指導によって、[redacted]あるC0年七・七、山崎発言以降の中核派の裏切り行動に一連動の一環として、八派共闘解体に誘引しまきつつ東京入管闘の内部にも動揺をおこさせようとしているという事である。しかしながら中核派に対して、東京入管闘の主催として、連続闘争として、集会を開催し、我々と共に闘う事を呼びかけ、この闘争を通じて、八派共闘解体の策動を粉砕し、中核派の裏切り行為を暴露し、中核派の分裂を促進する事である。

6・30 礫川公園に結集した反帝戦線部隊

6・26 労学三百名、明大和泉に結集

全都労学叛軍集会開かる！

六月二六日、八部労学集会集会は、明大和泉六号館前に、先進的な労学三百の参加者を集結し、集会を開催した。

この日の集会は、六月一七日、反帝戦線、赤ヘル集会が、文学部より実力阻止として闘い抜いたことによって切り拓かれた、本格的な武闘等への第八の進撃を、七二年闘争の前哨戦として闘い抜いたまさしく東京入管闘等の戦闘を克ち取るべく、集会場を明大和泉に切り拓くべく、集会場を明大和泉に切り拓くべく、集会場を明大和泉に切り拓く

『反スタ』から民族主義 武闘議会主義への転落

革共同中核派批判

党の革命を完遂し本格的武装闘争の突入を宣言した我が同盟は五・三〇外務省突入を五戦士の闘いによって奪還し反帝統一戦線の革命的解体と地区共闘への再編に向けた闘いを貫徹してきた。この我々の党的前進に対して中核派は、五・三〇において我々の発言への妨害、そして沖縄奪還運動の破壊の機能を部落解放同盟の相互関係にまで利用して行い敗北し政治崩壊であることを自己暴露した。今の民族主義、武闘議会主義に転落した中核派による宮城一郎氏の解体は我々の前進の結果に他ならなかったのである。しかし武闘派の解体は我々の前進の結果に他ならなかったのである。六・一五における、八派の解体は我々の前進の結果に他ならなかったのである。

中核派は、「帝国主義の植民地支配の強化」を「ベトナム戦争は、「帝国主義の植民地支配の強化」を「ベトナム戦争は、「帝国主義の植民地支配の強化」を「ベトナム戦争

中間的動揺をくり返す旧構改の残骸

「主体と変革」派の社民的本質

（上）

共産主義者同盟中央労働者組織委員会

権力と闘えぬ大衆運動主義者のなれの果てに革命的鉄槌を

序

一九五八年十二月の第三回共産同の結成が、社会党は勿論のこととして「鉄の前衛」なる神話に安住していた日共をものこえる新たな前衛党建設のための闘いの第一歩であったことは周知の事実である。我々は安保闘争を分水嶺として、安保闘争の敗北を直接的に総括しつつ、日共の「主体と変革」派の社民的本質を暴露してきた。

我々自身の命がけの飛躍であり、かつこれに無自覚な第二次ブントの古い腐れた体質を克服化した。

とりわけ六七年十・八羽田闘争以降、深まりゆく戦闘アジアの民族解放闘争と民衆的に連帯し、これに厳対する日本帝国主義の侵略政策に対して、全国的に対決する闘いを大衆的に闘いぬいてきた第二次ブントは、にもかかわらず、六九年段階で日帝国家権力が破防法弾圧体制へと長期戦争を強化するに対し、四・二八闘争・沖縄闘争の地平を切り拓く戦略的展望を一応に奪いつつもそのような闘いを領導すべき党主体の内実が根底的に脆弱であることを露呈せざるを得なかった。幸よりも戦闘的に闘った第二次ブントは、それ故に一層ドラスティックに党建設における限界を突きつけ、その止揚が我々の闘争となったのである。

この二年間に於て「党の革命」は第二次ブントの党建設における敗北と誤り抜きないための「党の革命」を定義し、何倍的武装闘争の日火を切った我々同盟は帝国主義・官僚的労働運動の指摘による闘争を貫徹しつんする労働運動の現場の現場を革命的に打開していくことを重要な任務の一つとしているのであるからして「新民同」・社会党ブロックとの党派闘争は、これまでよりも一層鋭実的な任務となっている。我々は、あの六十年代後半の日本階級闘争の激動期を二つもひるむことなく拙い扱いた経験武器に、そこにおける「主」・「従」関係も徹底し上揚しうるのは唯一我々以外にはあり得ないという確信をもって、今での闘争を貫徹し、断くして第三次ブントの礎石を打ち固める段階に到達した。今四・二八闘争においてわが同盟・「親」党会・反帝・学生・報恩派全体が、日共の「主体と変革」的・ポピュラ個人主義的既成概念を粉砕しきったことにより、かつ五・二九外務省ゲバによって沖縄返還協定調印の段階に到達した。

さて、このようなわが同盟と極めて対照的な存在が「主体と変革」派の諸党である。問題で、看、青、学、諸党は、ある「主体と変革」派の諸党の内実が根底的に脆弱であることを露呈しているからも明れぬが、それは一面無理からぬことでもある。幸よりも社会党・構改派の流れをくむ主革の諸党は、地方的特殊党を抱擁しても、一度たりとも日本階級闘争の全国的共同闘争の経験をもつことなく、それまで我々の眼中に入らなかったのも当然であった。しかしながら「党の革命」を定義し、何倍的武装闘争の日火を切った我々同盟は帝国主義・官僚的労働運動の現場の現場を革命的に打開していくことを重要な任務の一つとしているのであるからして「新民同」・社会党ブロックとの党派闘争は、これまでよりも一層鋭実的な任務となっているのである。主革の諸党との党派闘争も、社民的本質の闘いの一環として既に的確な方向を有しているのである。

そもそもこれまでの「主体と変革」派の内部に胚胎した「新民同」・社会党ブロックの腐敗・堕落・日和見主義的な本質の暴露・粉砕・撃破闘争の一環として、「主体と変革」派の諸党の